

宮城山岳通信 第33号

目 次

巻 頭 言	千石信夫支部長 2 頁
令和 6 年度 通常総会 議事録	事務局 2 頁
定例役員会報告(5 月・6 月)	事務局 3 頁
山 行 報 告	
☆青森支部設立 30 周年記念 玉山登山	冨塚和衛 6 頁
☆春山山行(山形県・葉山)	遠藤幸寿 9 頁
☆熊野古道 集中山行	千石信夫 10 頁
☆大峯奥駈修行(吉野山～山上ヶ岳)	八尾 寛 11 頁
☆露払い山行(岩手県・五葉山)	石川弘子 14 頁
行 事 記 録	
☆第 37 回 日本山岳会全国支部懇談会	千石信夫 16 頁
☆第 44 回 日本登山医学会 学術集会	千葉正道 17 頁
随筆・エッセー	
☆救助活動の回想	
第 1 回 私が携わった遭難救助活動(報告) 高橋二義	17 頁
会 員 だ よ り	事務局 21 頁
今後の行事予定・トピック	事務局 21 頁
編 集 後 記	会報・編集出版委員長 21 頁

巻 頭 言

支部長 千石信夫

本部での定期総会も終了し、その決議事項には事業報告、決算などの他に、懸案事項であった入会金の減額が、7月1日から施行されることとなりました。これによって入会される方が増えることを期待したいとは思いますが、入会金だけの問題ではなく、様々な会員同士の交流や期待に応える多様な企画など、魅力ある山岳会が望まれるのだらうと思っています。

宮城支部も新年度に入り、定例山行の春山山行(葉山)、露払い山行(五葉山)など実施し、他には全国山岳古道調査PTによる熊野古道集中山行、神奈川支部での全国支部懇談会など、全国的な交流行事にも参加してきました。

今後の支部企画には、公益事業として「登山者のためのセルフレスキュー講座」、共益事業としての夏山山行の槍ヶ岳山行、本部集会委員会との共催企画で蔵王縦走など進められています。しかも新しく入会された方が企画を担っていただいていることも大変心強く思います。世代交代ではありませんが宮城支部も、もう少し会員を増やし、多様な人材から多様な企画が生れるような支部にしていきたいと考えております。

そんな折に支部デジタル委員会から、会員同士が活発に交流できるようにSNSを使った連絡方法にLineグループを利用したらどうかとの提案がなされました。現代の連絡ツールとしては大変便利なもので、登録会員に一瞬にして同時に連絡ができるメリットがあります。そろそろこのようなツールを利用して、もっと簡単に情報を共有できるようにできればと思っています。

最後に、今年も異常気象の傾向は変わらず、集中豪雨など各地で登山道の崩壊など発生しているようです。私たちもその対策を怠らず、注意しながら安全な登山を目指していきましょう。

【宮城支部令和6年度通常総会議事録】

1. 日 時 令和6年4月25日(木)
2. 場 所 仙台市生涯学習支援センター
3. 議決権を有する会員総数 40名
4. 出席者 千石信夫、千葉正道、富塚和衛、柴崎徹、高橋二義、草野洋一、細川光一、横山哲、遠藤幸寿、鈴木則文、鈴木泰子、八尾寛、鳥山文蔵 計13名

12名の会員より委任状があり、合計25名と、会員総数の過半数を超え総会は成立した。

はじめに千石支部長が「日本山岳会は来年、120周年を迎え、さまざまな記念事業が佳境に入っています。そうした中、橋本しをり会長は“理念づくり”をスローガンにかかげ、山の楽しさを薦めていきたいと表明しています。宮城支部も会長の理念に添い、楽しく安全に登山していきましょう。今年は安全登山の啓蒙を図る登山教室を実施しますので、是非ご参加ください」と挨拶。このあと規約により千石支部長を議長に選出し早速、議題に入った。

5. 議 事

第1号議案「令和5年度事業報告」を富塚事務局長が説明。この中の共益事業の「山の天気ライブ授業」は、事業内容から「公益事業」に組み入れることになる。

第2号議案「令和5年度収支決算報告」は千石役員が説明。この中で支出の部「印刷製本

費」の備考「宮城山岳通信」は「宮城山岳」の間違い。また「その他(上記以外の費用)」の当期決算額が空白となっているのは「0」と修正した。この決算書の監査について会計監査の草野、横山両会員より適正であると報告。1号、2号議案は採決の結果、拍手多数で承認された。

第3号議案「令和6年度事業計画(案)」は富塚事務局長が説明。その中の「登山教室事業」は、登山に関心のある一般県民を対象に、外部から講師を招いて年2回実施し、登山者自らリスク回避できる知識や技術を身につける公募型の登山教室にリニューアルすることになる。また年度スケジュール表の中で何件か日程変更があった。

第4号議案「令和6年度収支予算(案)」について千石役員が、登山教室事業の実施に際し、新たな科目を収入と支出の部にそれぞれ新設したことを説明。また「支部友会費」で前年は支部友10名であったが2名退会し8名になったと報告。また支出の部「会議費・会場等借用費」の備考にある「シルバーセンター会議室」は使えなくなったので削除と補足説明があった。3号、4号議案は採決の結果、拍手多数で承認された。

続いて第5号議案「役員の選任(案)」について、富塚事務局長が新役員として鈴田則文(会員番号17201)、鈴田泰子(同17207)、八尾寛(同17252)の選任を諮った結果、拍手多数で承認された。

議案最後の第6号議案「個人情報保護管理指針制定(案)」は富塚事務局長より、会員連絡網の整備並びに会員交流の促進を図る会員名簿を作成する計画もあり、宮城支部に限っての指針を設け、開示する個人情報を慎重に運用していきたいと説明。出席会員より2件は

ど要望があり、事務局内で盛り込むことで6号議案は拍手多数で承認された(最終の宮城支部個人情報保護管理指針は『宮城山岳』第28号に掲載)。この規程は令和6年4月25日から施行となる。

このあと、新しく役員に選任された鈴田則文、鈴田泰子、八尾寛の各会員が抱負を述べ、富塚事務局長の締めめの挨拶で午後7時すぎ閉会した。閉会后、有志9名は東口から西口に移動、駅前の居酒屋で懇親を深めた。

【役員会議事録】

■令和6年5月定例役員会

日 時：5月15日(水)18:00～

場 所：仙台市生涯学習支援センター

出席者：千石支部長、千葉、富塚、柴崎、草野、遠藤、加藤、鈴田(則)、鈴田(泰)、八尾、鳥山 計11名

千石支部長より「新年度に入り、新たな事業計画に向かって進んでいきます。新しい役員も出席、新風を吹き込んでいただきたい」と挨拶。早速議事に入った。

《報告事項》

イ) 総務・財務委員会

(1) 支部連絡会議報告について(千石)

3月28日にZoom会議での報告。日本山岳会の理念、2024年度の改正事項、首都圏で東京支部設立などについて。

(2) 令和5年度事業報告及び会計報告の提出について(千石)

本部へ提出する書式にのった報告

(3) 令和5年度第12回(3月度)理事会議事録

(4) 令和6年度第1回(4月度)理事会議事録

(3)と(4)は富塚事務局長

(5) 熊野古道集中山行について(千石)

5月18、19日に開催。千石が参加予定

(6)第 37 回全国支部懇談会参加者(富塚)

5 月 25、26 日に開催。現在、千石、鳥田伊志、富塚夫妻の 4 名が参加予定

(7)第 37 回東北・北海道地区集会参加(富塚)

7 月 12、13 日に開催。現在、草野、八尾、富塚夫妻、石川弘子、石川(非会員)の 6 名が参加予定

(8)群馬支部設立 10 周年記念式典(富塚)

6 月 29 日に高崎市で開催、八木原罔明氏の講演会がある。追ってメールで配信する。

(9)宮城支部個人情報保護管理指針運用に伴う事務処理について(富塚)

総会で要望があった件は、指針の第 6 条(管理)の 2 と 3 に付加した。今後、会員個人にそれぞれ確認後、会員名簿の作成に進みたい。

(10)令和 6 年度総会議事録について(富塚)

本部に提出した議事録の説明

このあと、追加の報告があった。

○5 月 30 日に開催の支部連絡会(富塚)

Z o o mで行われる。参加者で取り上げて欲しいテーマを話し合う。

○登山者の為のセルフレスキュー講座(千石)

7 月 13 日に開催する講座を会員の皆さまのロコミやネットワークで P R してほしい。

○宮城・山形支部交流会について(千石)

山形支部より 9 月 15、16 日に鳥海温泉で開催する連絡が入った。

○7 月 25、26 日に開かれる高頭祭について

千石支部長と千葉副支部長が参加予定

ロ) 山行集会委員会(千石)

(1)早春山行実施結果 3 月 24 日 西吾妻山

(2)春山山行実施結果 5 月 12 日 葉山(遠藤)

(3)夏山山行実施計画(7/16~20)について

担当の八尾会員が夏山山行のスケジュールを説明。現時点で 5~6 名の参加者。

尚、6 月 29 日に計画している「露払い山行」

は草野会員がリーダーでプランする。

ハ) 会報・編集出版委員会(鳥山)

(1)「宮城山岳」第 28 号の発行について

現在、印刷に回り 5 月 20 日頃、完成予定。その後、会員宛に郵送される。

(2)「宮城山岳通信」第 33 号の編集方針

第 32 号は 4 月 17 日にメール配信。第 33 号は 7 月中に編集、年 4 回の発行をめざす。

二) 他委員会からの報告

○自然保護・科学委員会(柴崎)

丸森の筆甫地区にある山が太陽光発電のパネルで覆われている。

○高所登山・医療委員会(千葉)

松本市で日本登山医学会のフィールド研修があり参加する

《審議事項》

総会で承認された 3 役員の所属委員会について千石支部長より発表され、了承された。

鈴田則文・・・山行・集会委員会(主に親子登山などを担当)

鈴田泰子・・・女性懇談委員会

八尾寛・・・山行・集会委員会と海外・高所登山・医療委員会

《その他》

(1)台湾東部沖地震のお見舞金(富塚)

会員より 9 万円が寄付され、宮城支部からの 1 万円を加えて 10 万円を台湾山岳協会に持参したところ、政府の窓口にして欲しいとなり、国の衛生福利部へ振り込んだ。

(2)青森支部設立 30 周年記念玉山登山実施について(富塚)

宮城支部から富塚が参加。5 泊 6 日

(3)大峯奥駈修行について(八尾)

6 月 26 日~30 日。個人山行として取り扱う。現在、3 名が参加予定。

(4)新役員が増えたので、役員連絡網を作り直

し、また令和6年度の事業計画も日程変更や新規事業もあり、改めて作り直すことにした。

■令和6年6月定例役員会

日 時：6月19日(水)18:00～

場 所：仙台市生涯学習支援センター

出席者：千石支部長、千葉、富塚、柴崎、高橋、横山、草野、遠藤、鈴木(則)、鈴木(泰)、八尾、鳥山 計12名

冒頭、千石支部長より「6月15日に東北大学山岳部100周年記念シンポジウムに参加、いろいろ教えられることが多かった」と挨拶、議事に入った。

《報告事項》

イ)総務・財務委員会

(1)支部連絡会議報告について(千石)

5月30日(木)にオンラインで開催、千石と富塚が参加。入会申込書のデジタル化で事務処理が早くなる。会報「山」はHPからのダウンロードによって郵送費を削減する協力を。また超党派議員連盟による「山岳基本法」を制定する動きなど。

(2)支部助成金の未精算について(千石)

本部より宮城支部への助成金で6万円強が精算されていない連絡があり、精算する。

(3)「山岳」掲載用支部の活動報告原稿(富塚)

富塚事務局長がまとめた原稿を確認する。

(4)令和6年度第2回(5月度)理事会議事録(富塚)・・・本部理事会の報告

(5)令和6年度事業計画(総括)見直版(富塚)

新たな山行や行事を追加した事業計画スケジュール表を説明、確認する。

(6)宮城支部役員連絡網について(富塚)

「自然保護・科学委員」の宇都宮昭義さんが支部役員になるか、本人に確認する。連絡網に記載されている電話番号で間違いや変更が

ある場合、富塚事務局長へメールする。

(7)各種委員会名簿について(富塚)

前回の役員会で承認された鈴木則文役員が山行集会委員、鈴木泰子役員が女性懇談委員、八尾寛役員が山行集会委員兼海外・高所登山・医療委員となる。

(8)第37回全国支部懇談会参加結果(千石)

※後記の「行事記録」参照

ロ)山行集会委員会

(1)露払い山行(6月29日)実施計画(草野)

現在、千石、草野、石川、千石友人2名の5名が参加予定。

(2)本部・宮城支部合同山行実施予定(10月)について(八尾)

Zoom会議で詰めた結果、1泊2日で蔵王連峰縦走とした。宿泊するペンションの収容人数で募集は18名。例えば本部9名、宮城支部9名。日程は秋山山行の10月5日(土)、6日(日)に合わせる。

(3)セルフレスキュー講座(千石)

7月13日(土)に開催するスケジュールと講座内容、並びに役員の担当を説明。現時点で参加者は35名。会員と一般は半々の状況。

(4)北アルプス夏山山行(八尾)

7月16日(火)から20日(日)、西鎌尾根から槍ヶ岳を目指す山小屋4泊の夏山山行は、5名が参加希望、あと1名が増えるか。

ハ)会報・編集出版委員会(鳥山)

「宮城山岳通信」第33号は、6月までの山行及び行事を編集、7月発行をめざす。

ニ)デジタル委員会(富塚)

メディア委員長の加藤知宏役員より支部会員等のライングループを作成する提案があった。従来メールで行っている山行案内や会報発行等をライングループを利用することで、個別にアドレス入力しなくても一斉にメッセ

ージを送れるメリットがある。話し合った結果、やれる範囲で実施してみることに。

ホ) 他委員会

(1) 山岳古道調査特別委員会(富塚)

6月3日に全国山岳古道意見交換会がZoom会議で開かれた。120ある古道の内、本部に上がっているのは半分の60道。宮城支部からは現在、5道のうち3道を提出。本部から、この3道についての問合わせ等はきていない。

(2) 自然保護・科学委員会(柴崎)

太陽光発電の動きを引き続き注視している。高橋委員：露払い山行で登る五葉山が、シカの食害でひどい状況なので見てきてほしい。

(3) 海外・高所登山・医療委員会(千葉)

6月7日(金)から9日(日)まで第44回日本登山医学会学術集会が乗鞍観光センターで開催され参加した。救急搬送や雪崩の救出などを体験した。来年は石巻で開催予定。

《審議事項》

それぞれの報告の中で審議したので割愛

《その他》

○「宮城支部登山計画書に関する取扱い基準」運用の現状について(富塚)



▲五葉山のシャクナゲ(石川会員撮影)

【山行報告】

青森支部設立 30 周年記念玉山登山

二回目の玉山登山

報告者 富塚 和衛

実施日 令和6年4月14日～19日

参加者 富塚和衛、松元秀平 計2名

玉山は、台湾に鎮座する極東アジア一高峰の名峰です。日本統治時代には、富士山よりも高い「新しい日本最高峰」の意味で、明治天皇により“新高山”と名付けられたそうです。米国に解読されていたとされる第二次世界大戦で発令された日米開戦の日時を告げる大日本帝国海軍の暗号電文『ニイタカヤマノボレ一〇〇八』の「ニイタカヤマ」とは、この山の事です。

そんな玉山に、2回目となる登山のチャンスが訪れた(1回目は2018年10月の宮城支部設立60周年記念玉山登山)。今回は青森支部設立30周年記念事業としての玉山登山に同行させて頂くことになったのです。

しかし、登山予定の2週間前に、台湾東部沖地震が発生し、中心地の花蓮地区では大規模な山崩れや高層ビルが傾くなど、大きな被害状況が日本でも大きく報道されました。

この地震により、玉山登山の中止も考えられることから、早々に、今回の玉山登山のガイドを務めて頂くことになっている中華民国山岳協会の林哲全さんにメールで被害状況を問い合わせたところ、その返事は、排雲山荘の情報では、登山道は「大丈夫」との事でしたので安堵しました。ただ、念のためヘルメットを持参するようにとの指示がありました。

地震の影響は心配するほどではなく、青森支部設立30周年記念の玉山登山は計画通り実施する事になりました。参加者は青森支部

6名、山形支部1名、宮城支部2名の計9名。
登山隊長は須々田秀美青森支部長。4月14日の午後、仙台空港に集合し、エバー航空で一路台湾の桃園国際空港へフライト。そこで林哲全さんの出迎えを受け、バスで台北市内のホテル洛碁大飯店B館へ。15日(2日目)は移動日。バスで阿里山閣大飯店へ移動し一泊しました。

4月16日、17日は、愈々、一泊二日の玉山登山の日。天気予報が気になるが、予報は2日とも良好。大飯店からバスで上東埔駐車場まで移動。そこから排雲登山サービスセンターまで徒歩移動し、玉山に登るためのパスポートチェックを受け、入園登録を済まし、バスで林道を玉山登山口の塔塔加登山口まで移動した。



▲塔塔加登山口

登山口から排雲山荘までは距離にして約8.5^{キロ}、標高差は約800^{メートル}の山旅となります。勾配はきつくないようです。林哲全ガイドを先頭に登山開始。バイオトイレがあるモンロー亭、白木林休息亭などで休憩を取りながら、足元に咲くタテヤマリンドウに似た可憐な花に誘われ、そして、山腹に咲く薄桃色の玉山シャクナゲに疲れを癒やされながら登ること約6時間半、全員無事、排雲山荘に到着しました。道程は落石の危険はあるものの、登山道はしっかりと整備されていました。

17日、2時に起床し、3時に玉山山頂を目



▲排雲山荘で松元会員と

指し排雲山荘を出発しました。ヘッドライトの明かりを頼りに歩を進め、山頂に辿り着いたのは6時30分。山荘からは3時間半の行程でした。大賑わいの山頂からは主峰玉山を取り囲むように東峰、南峰、西峰、北峰、北北峰などの山々が朝日に光り輝いていました。1回目の登山時には、この景色を目にすることが出来ませんでした。高山病に^{さいな}苛まれ乍らも登って来た甲斐がありました。素晴らしい台湾を代表する山岳風景を目に焼き付けることが出来ました。私にとっての登山人生の中でも記憶に残る一枚の映像となりました。



▲玉山山頂で記念写真

30分程滞在して下山開始。途中、排雲山荘で朝食を摂り、登山口まで一気に降り、玉山登山は無事に終了した。塔塔加登山口からバスに揺られての帰路、道路脇に展望台がありました。そこからは右に西峰、左に北峰、北北峰を従えた玉山の鋭鋒が見られた。空を突

くようなその山容は、^{まさ}将に東洋のマッターホルンと言った感がありました。



▲展望台から望む玉山

玉山の雄姿を心に刻み、その後、台湾総統府時代の玉山登山口である新高山登山口に立ち寄り、温泉付きの沙里仙渡假村ホテルにバスで移動して一泊しました。玉山国立公園内での飲酒は禁止になっていて(飲酒による事件が起こった)、園内に滞在した3日間は断酒となりました。晩酌党にとっては、実に残念な措置でした。隠して持参した方も居られるようでしたが・・・。

18日は台北市に移動し、故宮を見学しました。故宮郵便局で、台湾東部沖地震見舞金を青森支部ともども林さんの協力を得て振り込みました。夕食は、張玉龍さん、林哲全さんをお迎えしての最後の晩餐会となる。私にとって張さんとは6年ぶりの再会でしたが、親交を深めさせて頂きました。御高齢にも拘わらず、足を運んでいただき感謝に堪えません



▲晩餐会会場で記念写真

でした。

張さんは、中華民國山岳協会顧問の立場でお仕事をされるとともに、陽明山国家公園義務解説員、台北生態学苑主事、中華健康登山会常務理事永久会員の立場でもお仕事に携われています。また、日本の山岳界とも造詣が深く、特に田部井淳子さんが主幸されていた「H A T-J」にも、台湾の子供たちを引率して来日されています。裏磐梯で開催された「H A T-J」に来日された際には、中華民國山岳協会の生みの親でもある「平沢亀一郎」の生まれ故郷である仙台を訪れてみたいとのことで、10名ほどで来仙されたことがありました。その際、平沢亀一郎が宮城支部の会員であったことから、宮城支部挙げて張玉龍さん一行をおもてなしさせて戴きました。それ以来、張さんとは親書、メールを通じてお付き合いをさせて頂いてきました。

話が長くなりましたが、今回、青森支部30周年記念玉山登山に同行させていただき、須々田青森支部支部長はじめ、参加された皆様に感謝申し上げます。これまで単独で宮城支部、秋田支部が中華民國山岳協会と交流を行って来ましたが、今回の企画に山形支部、宮城支部の東北3支部が参加したことは、これからの東北支部の連携のあり方にも大きな道標になるのではないかと思います。また



▲張さんとツーショットの富塚会員(右)

東北地区支部の交流、絆も大いに深まるのではないかと期待するところでもあります。その切掛けになれば嬉しい限りです。

私個人的には、親交を温めてきた張玉龍さん、林哲全さんに再会でき、新たに親交を深めることが出来たこと。青森、山形支部ともども玉山登山ができ、且つ中華民国山岳協会との交流を深められたこと。2 回目にして西峰、北峰、北北峰を従えた玉山の尖塔を目に出来たこと。二度目も高山病に罹^{かか}ってしまったこと。そして排雲山荘では同室の皆様にご迷惑をお掛けしてしまったことなど、大変記憶に残る「日本山岳会青森支部 30 周年記念玉山登山 6 日間の旅」でした。有り難うございました。

共益事業山行

春 山 山 行

報告者 遠藤 幸寿

実施日 令和 6 年 5 月 12 日(日)

山 域 葉山(1462m・山形県寒河江市)

コース 畑コース(下山一部立岩コース)から
葉山頂上及び奥の院往復

参加者 遠藤幸寿(C L)、千石信夫、草野洋
一 以上 3 名

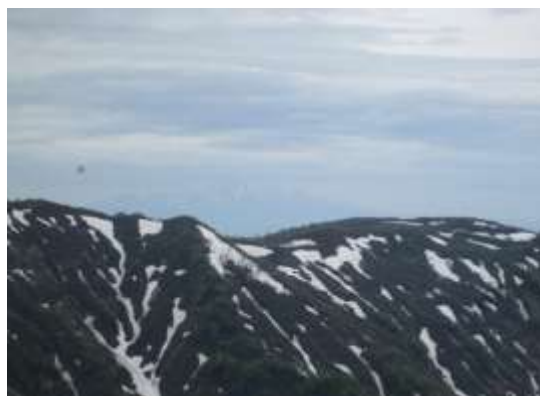
当日は曇天、強風の中、早朝(午前 7 時 30 分)の仙台を出発。村田インターチェンジから東北自動車道を経由、村田ジャンクションから山形自動車道に入り、西川インターから寒河江市の畑集落、葉山市民山荘の駐車場へ向かいました。9 時 30 分着、すでに 20 台ほどの車が駐車しており、登山道も混雑が予想されました。山形県葉山の天気は晴れ、蒸し暑く虫が多く、虫よけスプレーを借りて対処し



▲新緑の中、残雪を踏みしめながら登りました。

9 時 45 分、葉山市民山荘の脇から家の点-inする集落を抜け、林道へ(最後の人家の右わき道は、集落の墓地を抜けて登る立岩コース＝廃道の様子)。30 分ほどで標識のある登山道へ入る。新緑のブナの林をひたすら登ると、下山のとき降りた立岩コース分岐のある一服台に着く。

傾斜を緩めながら残雪の表れた林間を進むと突然、稜線に出て視界が広がる。聖仏平で外輪山の縁に当たり、村山地方やその先に蔵王連峰が手に取るように眺められる。稜線上からは左手に葉山本山に連なる更に大きな外輪山が、右手には祓^{はらいがわ}川越しに、岩野コースの稜線がそれぞれ見える。



▲岩野コースの稜線

12 時 00 分、お花畑で岩野コースと合流。本山と奥の院が遙か遠く眺められる。その奥には大きな月山が白衣をまとい覆いかぶさ



▲葉山山頂にて、左が草野、右が千石

るように大きく、更に右手前方には薄らと鳥海山が裾野を広げて美しい。小僧森、大僧森、大つぼ石とピークを越え、4 つ目のピークで葉山本山(1462m)に到達、13 時 30 分、昼食となる。大きな月山を背景に食べるおにぎりは格別でした。



▲雪化粧が輝く月山の雄大さ

ここから奥の院までは 20 分ほど、立派な赤い鳥居と社殿が出迎えてくれる。より近くなった鳥海山が、秀麗な姿で裾を象瀧の日本海



▲奥の院社殿前にて

にたらしめている。周辺には大朝日岳を中心とした朝日連峰、吾妻連峰、薄らと飯豊連峰も遠望でき、天上の楽園となっている。足元には雪線上に白根アオイやショウジョバカマなど多数の花々が出迎え、その花に誘われた虫たちが多く集まる山のようなのだ。

葉山山頂を 14 時 45 分、下山にかかる。往路を一服台まで降り、16 時 15 分立岩コースへ左折して(入山形跡が無いコース)、急傾斜地をすべりながら大木の 3 本杉と墓地を過ぎると、まもなく畑集落に降り立ち、登山はおしまいとなった。17 時 15 分、葉山市民山荘(寒河江市)着。

復路の山形道へは寒河江インターチェンジから、東北自動車道の村田インターチェンジを経由して仙台へ、19 時 00 分着。快晴無風の登山は無事終了しました。(今回 3 名の参加者では、ちょっと寂しいな～)

日本山岳会 120 周年記念事業

熊野古道 集中山行

報告者 千石 信夫

期 日 令和 6 年 5 月 17 日(金)～20 日(月)

参加者 千石信夫、千石裕子 以上 2 名

宿 泊 南紀勝浦温泉「ホテル浦島」

山岳古道調査プロジェクトチーム主管の熊野古道集中山行に参加してきた。私は、中辺路の小雲取越え(小口から大斎原)を歩き、約 16 ㎞、約 6 時間半の行程だった。宮城支部からは私と、家族参加として妻が参加した。

当日、山行の集合時間には間に合わないの、前日仙台空港発 7 時 50 分発にて伊丹空港へ飛び、新大阪から J R 特急くろしお 11 号

にて紀伊勝浦駅に着いた。16時16分だった。一日仕事で実に遠かった。支部には何度も歩いている会員もいるが、私は熊野古道は初見参。宿泊場所は、南紀勝浦温泉「ホテル浦島」、なんと岬が丸ごとホテルの施設のような、誠に巨大なホテルだった。早速に温泉を楽しむことにして、太平洋の荒波が打ち寄せる忘帰洞という、洞窟の中の風呂はなかなか心地が良かった。前泊からの同室は北海道支部の皆さん、中部空港からレンタカーで来られたとのこと。車のナビのデータがひと昔前で、道に迷いながら、予定にないお伊勢参りまでして苦労しながら辿り着いたようだ。

翌日チャーターバスにて、Cコース中辺路小雲取越の小口に向かう。ここで大雲取越えを越えて小口に宿泊したDコースグループと合流して歩くことになった。ここで、リーダーからコースの説明や、参加メンバーの自己紹介などを行い出発、総勢約20名、天候は快晴！

最初から延々と登りが続いて大変だったが、その後は、木陰の中の道が続き、単調な道ではあるが快適な古道歩きだった。さすがに世界遺産ということもあり、すれ違う人々は半分以上が外国人だったように感じられた。全員一緒に行動は難しく、先頭、中、後方と、かなり離れ、^{うけがわ}請川から最後の大斎原まで歩いたのは先頭グループだけで、あとはサポート車で大斎原まで移動していた。大斎原で各ルートから歩いてきたメンバーが集合し記念撮影したようだが、間に合わず漏れてしまった。記念山行はここで終了し、バスにてホテルに向かった。同行メンバーは北海道、山形、多摩、関西、MCCなど様々。^{わきあいあい}和気藹々と歩き、特に女性が元気で賑やかな声が弾んでいた。山形支部の武田さんは、寒河江山岳会の方だ

った。宮城支部山行で先週、葉山に登ったことを話したら、山道の刈り払いなど管理されているそうだ。また青森支部主催の台湾にも参加されたそうだ。

集中山行は総勢約120名の参加とのこと。夜の懇親会では約90名が集い、永田弘太郎副会長は、装束の姿で会長挨拶を代読し、近藤理事からは古道調査の現状について報告がなされた。また参加された各支部からは調査の現況などを報告した。乾杯の音頭は水谷関西支部長が登壇し、懇親会が開始された。美味しい各地の酒などを楽しみ、盛会裏に終了した。企画や世話役の皆さんには感謝したい。

初めての熊野エリア、なるほど山また山。せつくなので、翌日は熊野三山を巡ってから帰途についた。

大峯奥駈修行に参加して

(1) 吉野山～山上ヶ岳

報告者 八尾 寛

実施日 令和6年6月26日(水)～30日(日)

コース 吉野～熊野 ^{おおみねおくがけみち}大峯奥駈道

参加者 富塚和衛、八尾 寛 以上2名

吉野山の寺院、櫻本坊が令和6年度の大峯奥駈修行を6月26日から30日の5日間にわたり実施することを知り、私と富塚和衛会員が参加した。この修行では、吉野山から^{しゃかがたけ}釈迦ヶ岳の麓の^{ぜんき}前鬼までの約47^きを、3日間かけて走破する。累積標高差は登りが約3800^m、下りが約3700^mあり、最も厳しい修行と言われている。20代のころ、友人と6人で奥駈コースに挑戦し、^{どろがわ}洞川から前鬼を目指したことがあったが、雨と疲労で^{みせん}弥山まで進んだところで断念した。今回は、この思い出をた

どる山旅でもある。

6月27日(木)午前2時に起床し、朝食を終え、午前3時に本堂前に集合した。空の中ほどに下弦の月がかかり、星が輝いていた。「今日は天気が良さそうや」、「暑くなるかもしれへんな」。誰ともなく、言葉を交わしながら出発した。法螺貝の音が未明の町に響き渡る。ドイツ出身の副住職・ザイレ法雲師が先導し、26人の行者が1列になり、黙々と登り始めた。最後尾は住職の巽良仁和尚である。吉野から熊野に至る奥駈道には七十五摩(なびき)と呼ばれる霊所があり、それぞれで碑伝(ひで)というお札を納め勤行する。熊野本宮を第1番とし、吉野へ至るのを順峰(じゅんぶ)、吉野から熊野へ至るのを逆峰(ぎやくぶ)という。午前5時、夜明けの光に照らされた大きな鳥居が見えた。第71摩、金峯神社の修行門である。吉野から山上ヶ岳の大峯山寺までには、発心門、修行門、等覚門、妙覚門の四門がある。発心門は、吉野蔵王堂の下にあり、昨日タクシーで脇を通った。等覚門と妙覚門は、山上ヶ岳にある。一礼して修行門をくぐった。いよいよ奥駈修行が始まるのだと、身の引き



▲吉野山奥千本を進む行者一行。第70番愛染(あいぞめ)宿に建つ道標。奥のものは新しく、「右 西行庵・苔清水」「左 山上ヶ岳」などと読める。手前は「西行古跡」と和歌が刻まれている

締まる思いがした。

ここからは、奥千本である。先人に思いを馳せつつ、青根ヶ峰(858.1m)の頂上を越えた。しばらく林道と登山道を交互に歩み、6時40分、四寸岩山への急登が始まった。“サンゲサンゲ”、“ロッコンショージョー”と声を掛け合いながら、約400mの標高差を一気に登り詰めた。8時10分、四寸岩山の頂上に到着し、勤行と休憩。ところが、富塚会員に異変が起った。右足がつり、歩行困難とのこと。汗をびっしょりかいている。曇り空とはいえ、かなりの蒸し暑さである。それでも一行とともに前進し、10時ごろ、第69番摩、二蔵(にぞう)宿1077mに着いた。ここは、吉野と山上ヶ岳の中間点に当たり、かつて百丁茶屋という休憩所があったという。今は無人の避難小屋が建っている。1丁が約109mなので、もうすでに10時、7時間近く歩いてきた。ここで、櫻本坊でもらった弁当を半分食べるよう指示があった。弁当のフタを開けると、大きな握り飯が2つ入っている。ありがたや、ゆうに2食分はある。富塚会員は住職と相談し、ここで山を下りることになった。この百丁茶屋跡の手前にある九十丁標石のあたりで、奥駈道と林道が交差する。住職が手配したタクシーは、そこまで迎えに来るとのことで、一安心だ。10時30分、われわれ行者の一行は、富塚会員を一人残し、大天井ヶ岳を巻く在来道へと旅立った。

小さな沢をいくつか横切りながら、コケとクサアジサイの美しい森の中を進んでいくと、11時20分、前方に女人結界門が見えた。五番関である。ここ以外に洞川(どろがわ)の清浄大橋、弥山へ向かう奥駈道の阿弥陀ヶ森、稲村ヶ岳に至るレンゲ辻など、山上ヶ岳へ通じる全ての登山道に女人結界門がある。全国

津々浦々にある修験道場で、現在でも女人禁制を敷いているのは、大峯山だけである。女人結界門をくぐると、いよいよ山上ヶ岳への最後の登りが始まった。12時10分、小さなお堂の建つ広場に出た。鍋冠(なべかんむり)行者堂である。お堂の脇には大きな中華鍋が吊されている。ここで勤行し、弁当の残りを食べた。

険しい鎖場^{くさりば}を越えると、原始の面影をとどめる爽やかな尾根道が続く。13時40分、右手に送り不動が見えた。洞辻(どろつじ)茶屋に着いたのだ。「吉野まで約24[㍰]、洞川まで約8[㍰]、本堂まで約2[㍰]」と書かれた道標が懐かしい。昨年、この道標を見て、大峯奥駈への憧れが再燃したのである。ここから鐘掛岩、西ノ^{のぞき}視などの行場が続々と現れるが、今回は省略だ。等覚門をくぐり、宿坊の立ち並ぶエリアに入った。15時15分、櫻本坊の参籠所(さんろうしょ)に着くと、洞川から上がってきた行者2人が出迎えてくれた。うち一人は75歳で、今回の修行者中の最高齢である。数ヶ月前に腰骨を骨折し、回復途中だという。「平地を歩くよりも、山道の方が楽や。清浄大橋から4時間かかったけどな」。



▲洞辻に建つ道標

参籠所に荷物を下ろし、大峯山寺へ向けて出発した。妙覚門をくぐると、眼前に巨大な本堂が見えてきた。本堂に入り、内陣本尊の



▲大峯山寺妙覚門

蔵王権現を参拝した。本来秘仏なのだが、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録20周年に合わせ、特別に開帳されているとのことである。次いで、護摩法要である。立ち上る炎が揺らめいて、行者の顔を照らす。法螺貝が鳴り響き、読経が終了した。ここまで身に着けていた無地の白行衣に御朱印をもらった。山上ヶ岳山頂へ行った。1719.4[㍰]の三角点の傍^{かたわ}らに、湧出岩(ゆうしゅついわ)がある。修験道の開祖、役行者^{えんのぎょうじや}が修行中に、蔵王権現がこの岩から出現したと伝えられている聖跡に手を合わせた。

本堂へ戻ると、ちょうど午後5時、寺僧が2人、扉を閉めているところだった。霧に包まれた参道を下りていくと、苔むした登拝記念碑が両脇に並び、にこやかに出迎えてくれているように感じた。櫻本坊から山上ヶ岳まで約18[㍰]、長かった1日も、そろそろ終わりに近づいている。明日は、山上ヶ岳から弥山までの15.5[㍰]を14時間で歩き、明後日は、弥山から前鬼までの13.3[㍰]を13時間かけて歩く予定である。天気はあまり良くなさそうだ。どんな山旅が待っているのだろうか。

法螺貝の音に 背を押され踏み出す月こそ
照らせ先人のみち

これよりは 人住まいする家はなし
 鳥居をくぐりて山へ分け入る
 先人の結びし庵^{いほり} 彼のあたり
 吾れまた死なん桜のもとに
 苦しみは いつかは変はる喜びに
 頂^{いただき} 目指し六根清浄
 御朱印を背にぞ戴き^お下り行げば
 げに懐かしき苔^{いしづみ}の石碑
 (この「大峯奥駈修行」は、八尾会員によると、
 ②山上ヶ岳～弥山、③弥山～前鬼の続きがある
 とのこと。乞うご期待ください)

共益事業山行

露払い山行

報告者 石川 弘子

実施日 令和6年6月29日(土)
 山 域 岩手県 五葉山(1340.4m)
 コース 赤坂峠登山口～畳岩～石楠花荘～日
 枝神社～山頂～同ルート下山
 参加者 草野洋一(C L)、千石信夫(S L)、
 石川弘子、一般＝佐藤俊幸、川村真
 貴 以上5名

●出 発

6時00分、仙台駅集合。車1台で一路、大船渡へ。五葉山は林産資源が豊富で重要な山であったことから、藩政時代は伊達藩直轄で「御用山」と呼ばれていたが、後に五葉松になぞらえ「五葉山」と呼ぶようになったそう。東北三百名山であるとともに、花の百名山としても知られている。

8時30分、赤坂峠口を出発。エゾハルゼミの蟬時雨^{せみしぐれ}を聞きながら、3合目の養^{きい}の河原を過ぎ、畳岩のある4合目まで、木漏れ日の射す林道をのんびりと歩く。梅雨の最中でありながら雨にも降られず、ときおり驚くほど青



▲ササを揺らして風が吹く

い空が覗くのは、晴れ男の草野リーダーのなせる業か、それとも他のメンバーの普段の行いの良さか・・・。

小休止後、4合目の鳥居をくぐると勾配は急になる。ダケカンバが林立する中を、一面のササを揺らして吹き過ぎる風に背中を押されて登る。7合目で再び小休止。千石支部長が持参されたキュウリの一本漬けが振舞われ、活力が戻る。

●山 頂

8合目手前の小さなお社^{やしろ}に登頂と無事を願い、さらに登る。この辺りからシャクナゲの姿が見え始め、気づけば辺り一面がシャクナゲだ。固く閉じたつぼみは、ハスの花のそのようだ。ほぐれるように咲いた薄ピンクの花弁に黄緑の斑点が混ざる、色の妙。夢中で写真を撮っているうちに、9合目の石楠花荘に到着。しびれるほど冷たい水で喉を潤す。稜線付近で、これほど豊かな湧き水はどこからくるのだろう。

なだらかな道を進んで日枝神社に参拝し、11時15分、山頂に到着。東日本大震災による地盤沈下で山頂は少し低くなったそう(1341.3m→1340.4m)。400[㌢]ほど東にある最高点の「日の出岩」(1351m)まで歩を進め記念撮影。岩のてっぺんには「月」の文字が彫られていた。



▲最高点「日の出岩」で記念撮影

●寄り道

山頂に戻る途中、「ヒカリゴケのある場所に案内しましょう」という岩手県グリーンボランティアさん(腕章を付けていた)の声が聞こえ、他のパーティーの後について案内していただく。初めて見たヒカリゴケは、岩陰で文字どおり光っていた。ボランティアさん曰く“発光しているのではなく、他の光を反射しているだけ”だとか。キラキラと輝く黄緑色を写真に撮りたいと苦心するが、難しい。佐藤さんの即席スマホ写真講座が開かれ、みんなで挑戦。私も何とか、それらしい写真を撮



▲岩陰でキラキラと光るヒカリゴケ

ることができた。この輝きを多くの人に見て欲しいが、荒れてしまわぬことを心から願う。

●屋 食

石楠花荘で昼食。平成 30 年に改築された小屋は清潔で、水場もトイレも目の前にあり快適の一言。先ほどのボランティアさんに、ここで再会する。小屋の管理人というわけではないが、利用者へのマナーの啓発や自然解説、高山植物の保護などを行っているそうだ。別れ際にお名前を伺ったら、中山さんと名乗られた。どうもありがとうございました。

●下 山

下山路は気持ちにゆとりができ、さまざまな花を愛でる余裕ができた。ハイマツ(実)、ガンコウラン(実)、シラネニンジン、ウラジロヨウラク、オトギリソウ、ヤシオツツジ、マルバダケブキ、ツツジ、ハナニガナ、ウツギ、ウツボグサ。山は春と夏の端境期だった。展望のきく場所からは、大船渡湾や五葉湖(鷹生ダム湖)を眺めることもできた。

14 時 15 分、赤坂峠口に到着。ここへきて



▲遙かに望む五葉湖(鷹生ダム湖)

千石支部長持参の極甘半生さつま芋が振舞われ、エネルギー補給したメンバーからは「もう一度登れそう」という声も聞かれたが、一笑、帰仙。充実した楽しい一日だった。



▲岩手県グリーンボランティアの中山さん

【行 事 記 録】

■第 37 回 日本山岳会全国支部懇談会 ～春の湘南平・三浦アルプス・鎌倉～

報告者 千石信夫

期 日：令和 6 年 5 月 25 日(土)～26 日(日)

宿 泊：グランドホテル神奈中

参加者：千石信夫、冨塚和衛、冨塚真味子、
鳥田伊志(支部友) 計 4 名

神奈川支部主管の全国支部懇談会に参加した。初日には神奈川支部主催の第一回岡野金次郎碑前祭が湘南平(高麗山公園)にて執り行われた。

岡野金次郎碑は日本山岳界の先駆者として顕彰された平塚市が建立し、昭和 36(1961)年 11 月 13 日に除幕式が行われたと記録があります。ウェストンとの出会いがなければ、日

本山岳会の設立は何年遅くなったかしろいと言われるほど、岡野金次郎の存在が大きかったことを改めて知る思いだった。

その碑前祭では込田伸夫支部長、落合克宏平塚市長、橋本しをり会長の挨拶があり、岡野金次郎氏ご子孫の岡野真様、小島烏水氏ご子孫の相良嘉洋様もご臨席され、碑前に献花された。120 周年記念事業のまさに記念となる第一回目の碑前祭だった。湘南平の展望台からは、とても眺めがよく、丹沢山塊の大山は特に雄大な山容が眺められた。三浦半島、伊豆半島など、快晴のなか素晴らしい眺望だった。

式典後、チャーターバスにてホテルに移動し、懇親会が催された。全国から参加された約 150 名ほどの会員で交流を深めた。

翌日の記念山行では 3 コースに分かれ、

- ① A コース：三浦アルプス縦走(健脚向き)
- ② B コース：鎌倉大仏ハイキング
- ③ 自由行動で観光

となっていた。宮城支部メンバーは、A コースに参加した。約 50 名が 6 班に分かれ、A コースのグループリーダーは高橋あかねさん。昨日の記念式典でフルート演奏をしてくれた方で、縦走中ではいろいろガイドをしていた。平塚駅から電車にて逗子駅に行き、逗子駅からバスにて風見橋に移動し、そこから田浦駅まで縦走。距離約 9 ㎞、約 5 時間半だった。このルートは眺めの良い所があまりなく、そしてアップダウンが続き大変だった。すれ違う人々は、近隣の人たちと見られるハイカーが多く人気のコースのようだ。終点の田浦梅の里に到着すると、一気に眺めが良くなり疲れが飛ぶようだ。2 月下旬から 3 月中旬のころは、見事な花園になり賑わいそうだ。ここで展望台を後ろに記念撮影し、田浦駅ま

で歩き、それぞれ解散となった。

■第44回 日本登山医学会 学術集会 参加報告

報告者 千葉正道

2024年6月7日～9日、松本市乗鞍観光センターを会場に、“フィールドでの実践と研鑽、そして対話による普及”をテーマに、原田智紀会長(日本大学医学部、日本山岳会理事)のもとで行われた。この学会は、医師や生理学研究者ばかりでなく、登山や高所での健康にかかわる全ての方が参加している。

急性高山病、高所肺水腫、低体温症、凍傷、山岳診療所、健康増進登山などの山岳医療に関する諸問題について熱い討論がなされた。特別講演は“山岳救助の現状とこれからの山岳医療の在り方”について、井坂道彦(長野県遭難防止協会・北アルプス南部地区常駐隊)氏よりあった。

8日の午前は、大雪渓／肩の小屋まで上がり、3つのグループに分かれてワークショップが行われた。①雪崩埋没の掘り出し、②要救助者の搬送および緊急搬出の待機、③直腸温などの測定登山。私は①に参加し、久しぶりにビーコン、プローブ、スコップを携行し復習した。

最終日の午後は、松本市民合同登山として、数人の市民と見晴峠まで歩きました。

来年の大会は6月7、8日、山内武巳(石巻専修大学人間学部・日本山岳会宮城支部会員)氏が会長で、石巻市で行われる予定です。東日本大震災では、学会が低体温症のキャンペーンを行い、また学会員有志が石巻市北上町の避難所および診療所に交替で支援をしました。

【随筆・エッセー】

救助活動の回想

～人は誰でも 自分は大丈夫と

思いがちである～

高橋 二義

現在、宮城支部の「指導・遭難対策委員会」で委員長を務める高橋二義会員が、これまで遭難救助活動に携わった回想を、上記標題の冊子として纏められました。今年6月10日に出された回想録は9ページにわたり、8件の救助事例を掲載した長文です。現在でも起きてしまう遭難が綴られ、そこから学ぶべき点は多いのではないかと思います。そこで「宮城山岳通信」で数回にわたり連載します。

はじめに筆者のプロフィールが冊子の冒頭にありますので紹介します。

「昭和16年7月16日福島県双葉郡浪江町で生まれました。昭和32年東北電力に入社。昭和34年6月仙台山想会に入会。昭和49年3月日本山岳会入会。平成13年7月定年退職以後2年間シニアスタッフ勤務後退職。最近では里山歩きを楽しみ、山野草を楽しんでいます」 日本山岳会会員番号7885

第1回

私が携わった遭難救助活動(報告)

私が登山をするようになったのは

昭和32年4月1日東北電力(株)宮城支店線路課配電係に入社配属の辞令を戴きました。

この年から会社は、年少社員として中学校卒業者の採用を始める。4月、5月と宮城支店及び仙台営業所にて社員教育を受けて各営業所に配属され、私は同僚1名と共に仙台営業所に配属されました。当時は“電工さん”と

呼ばれる職種で、「現場」と呼ばれる作業(建設・保守)を実施する外回りの毎日でした。電柱上で身の安全を図る綱も、綿糸を太く撚った胴綱と呼ばれた2.5^{センチ}くらいのもので、柱上部で片手で結ぶ物でした。ヘルメットも無い、ペンチも裸で鉄丸出し状態で配布され、職人氣質の強い職場でありました。電柱はすべてが木柱であり、南町通りと土樋変電所から河原町の間に鉄柱が設備されており、中央通りには太い太い木柱が設備されている時代でありました。それに昇るには昇柱器と呼ばれる用具を足に括り付けて昇る。すべてが木で特に腕木を電柱に取り付ける時には、かたの無い取り付けが求められ、よく指導を受けたものでした。

電線は第2種綿絶縁電線が外線の主流であり、屋内線も第4種綿絶縁電線であり、現在から当時を振り返ると大変な変わりようだと感じております。人も、設備も、施工方法も、そして資材そのものも大きく変わり、社会が大きく近代化へ向けて変わった時代の中でした。

生れて初めて山登りというものを体験させてくれたのも会社の先輩でした。入社数年後何とか一人作業が出来るようになり、バイクで計器類を持参し、故障計器の取替えやら誤差測定やらの作業が与えられて出歩くようになりました。その毎日の配りを指導していただいたのが先輩のYさんでした。午前の仕事が終って報告に戻ると、いつも机の端に「岳人」が置いてありました。当時はあまり関心を持っておりませんでした。今考えると、そこに掲載されていた山の風景とその説明を先輩から聞かされて、少しずつ山への関心が芽生えたような感じがします。

そして決定的な瞬間は、初めての一泊登山

でした。昭和34年10月3日・4日の船形山登山でした。3人でのパーティでしたが私が一番年下で、Yさんがリーダーでした。私は経験も知識も無く、一番の年下で初めての登山で山にテント泊まりをするのも初めてで、よく晴れた秋の日です。未経験な私は自分の事も良く理解しておらず、右足が約3^{センチ}短く、膝下の腓骨が無い事も気に掛けませんでした。この時すでに右足は膝下が太く腫れあがっていましたが、二人には話しておりませんでした。

二日目も素晴らしく晴れ上がって、生れて初めて全山燃えるような紅葉に、すっかり山の魅力に捕らわれてしまったのでした。年少だからと二人の間に寝せられ寒さも感じなく過ごし、船形山山頂に登り、定義に下りました。

右足は太腿から足首まで同じ太さに腫れあがり、回復に1ヶ月かかりました。翌年に成り、この感動が忘れられなくて、単独で山に入るように成り、回数も増えて来ましたので先輩方は、このままでは危ないからどこかの組織に入れようと言う事になったらしく、仙台山想会に皆で入会する事になりました。しかし、皆は間もなく辞めてしまい、とうとう私一人だけが残りました。

昭和36年、会に入会し、翌年の37年12月には冬の船形山企画に参加し、38年には“お前がリーダーで冬山企画をしてみろ”と先輩リーダーから言われて、他のどこも知らないもので再び船形山への登山を行ないました。これもうまくいき、来年の冬は朝日連峰に行こうとの話しが持ち上がり、8人居たメンバーで私のみが反対したのでした。私は2回の冬船形に登れた事が、いきなり朝日連峰では自信が無いので、同じ太平洋側の岩手山にしま

せんかと、リーダーにお話ししましたが聞き入れられませんでした。反対した私は計画から外されてしまい、39年12月から40年1月の大朝日岳登山計画は、私を除いた人たちで話し合われました。そして、私にとっては最も残酷な、友の搜索救助、遺体収容の初めての体験が訪れる事になるのです。

1 三度目の冬 大朝日岳 仲間三遺体収容 (昭和39年11月24日～28日間の活動)

それは、この計画の準備段階で発生しました。本計画に備えて大朝日小屋への荷揚げ行動で発生したのです。私は、この遭難事故は二重遭難と見ておりますが、この時3人の仲間を失いました。

経験の浅い私達は、日本海側高峰の天気を良く知りませんでした。船形山を冬2年続けて登ったことが朝日連峰に登る自信になったとは思いたくないのですが、今考えると“若さですね”と片づけるには、あまりにも大きな犠牲であったと残念でならないのです。あの時、私がもっと強く主張し、計画を変更していたらと思うと、これは発生しなかった遭難であると今も残念でならないのです。

23日朝、古寺鉾泉から3つのチームが大朝日小屋へ向けて出発したのです。最も早く出たのが正月計画の食糧など一斗缶3つをそれぞれ1缶背負った仲間の3人でした。その後山形から来た単独の方が出発し、最後に新潟の2人のチームが鉾泉を出ております。そして、最初に小屋に到着したのが最後に出発した新潟の2人、次ぎに仲間の3人でした。新潟の2人は小屋に泊まるとの事でゆっくりしてましたが、仲間の3人は軽い食事をして下りにつきました。

翌朝、2人が下る途中、小屋を出て間もな

いところで仲間の3人を発見し、急ぎ古寺鉾泉に通報したことが遭難の第一報となったのでした。私は当時、東北電力(株)西多賀出張所勤務でしたが、第一報は24日夕方、事務所に戻って間もなく入りました。それから救助活動終了まで1週間かかりました。3人の遺体を収容して完了でしたが、残る1名は翌年の6月に、その場所から数十メートル下の藪で発見されております。

この遭難事故で仙台山想会は2年間の冬山登山自粛を決めましたが、翌3月に宮城・山形の県境尾根縦走計画(宮城岳連主催)への参加は他会に迷惑になるので除外されました。山想会からは私とほか1名の2名だけ、その行動に派遣されました。

遭難第一報が入ってからすぐ現地に行くように連絡が入り、その日のうちに山形県の大江警察署に行き、現地情報とこちら側の持っている情報とを確認し合いました。警察が掴んでいた遭難者と我々の入山リストとの食い違いがありまして、遭難者1名の入れ替えをお話し了解していただきました。このとき警察では、宿からの情報で当会のメンバーはY、N、Oの3名となっておりますが、Yは入山しておらず、今回の入山者はN、OとKさんが応援に入っの3名でした。

地元では24日の内に地元救助隊が招集編成されており、夕方までに古寺鉾泉に入ったのです。我々は仙台から4名、東京からの企画者の1名と合わせて5名で25日に古寺鉾泉に入った時は、既に地元救助隊は現地に向けて行動しておりました。地元の方々は冬山の装備ではなく、消防団の服装で長靴にワカンを付けハッピー姿なので、とても風雪の1800mに堪えられる物ではありませんでした。新潟の2人が案内に付いて行かなければ、大き

な二重遭難に成っていたと考えております。それは風雪が激しく現地到達が出来なくて、しかも帰れなくて山中で一夜を過ごす事になってしまったのです。26日は、この地元救助隊を救出する行動となってしまう、これは大変な事になってしまったと感じておりました。が、何とか犠牲者を出さないで帰ってきましたので一安心でした。

27日は地元の元気隊員と山岳会員主体に組替えて再出発し、3人の遺体を収容して戻りました。この時も現場は風が強くて立っているのがやっとでしたが、遺体をそのまま運んで風の弱い所まで移動してから芝漣を作り、それに乗せて古寺鉱泉まで搬送して警察に渡しました。途中は地元隊員の働きで、雪が踏まれ搬送コースが確保され、鉱泉までスムーズに運ぶ事が出来ました。検死の結果は23日が死亡の日となりました。28日に、ご遺族の希望で仙台まで移送し、山想会が合同の葬儀を済ませて遺体のまま、それぞれのご遺族に引き渡しをしたわけであります。

この遭難を考える時、二番目に小屋を出た単独登山者が見つからなかった事、翌年事故現場の下部数十メートルで遺体が発見されたことを考え合わせると、私は次のように推測するのです。

◆推 測

朝一番に古寺鉱泉を出たのは、山想会の3名でした。次に出たのが単独登山者であり、最後に出たのが新潟の2人なのですが、大朝日小屋に着いたのは新潟の2人が最初に到着し、次に山想会の3人が到着しております。新潟の2人は最後に鉱泉を出て、最初は大朝日小屋に到着しているという事は、途中で2つのチームを追い越してきているのです。この時は積雪が数十センチあり、別ルートを歩

く事は普通考えられません。後続者は先行者のラッセルの跡を進むのがごく当たり前の行動です。2人は泊まりで小屋に残り、荷揚げ目的の3人は多少残っているであろうラッセルの跡を辿り下ったと考えるのが当然でしょう。すると降りる3人と登ってくる単独者と出会う事が必然の事です。

おそらく3人は上が風雪厳しいので共に下ろうと説得したと考える事が出来ます。単独者はそれを拒否し、小屋まで行くことを主張したと思われます。3人は上部の風雪の状態を体験して下りについているので、単独者をそのまま一人で行かせるのに危機感を持ち、小屋までそんなに遠くないので同行し、安全を確保しようと考えたに違いないと思えるのです。同行途中、風雪は先に通った時より厳しく成っており、小屋まで遠くないことは分かっていたが、足跡は風雪ですっかり跡形もなく消されて先を見る事も相当に困難となり、一時避難予定でY字雪渓となる沢の上部尾根端でツエルトを張り、風待ちをしたと考える事が出来ます。

しかし、風は全く収まらないで時間だけが過ぎて、同行していた単独者は帰ると云い出したと思われます。3人は留めたとは思いますが、云う事を聞かずにツエルトを出て行ったのだと推測できるのです。それは3人が遭難した場所の谷側に小さく赤布が付けてあった事が、単独者が下り進んだ方角を示したものと理解したからです。

翌日、大朝日小屋を出発した新潟の2人が出会った時には、1人は立って、2人は腰掛けて抱き合っていたという第一報でした。それは実際に現場に到着して1人のみが2人と数メートル離れて倒れた事と一致すると感じました。いわゆる2人が出会った時に1人は生

存していたということです。

以上、私の推測です。 (つづく)

【会 員 だ よ り】

◆宇都宮昭義会員のメールアドレスが変わりました。新しいメールアドレスは

kanryu007@gmail.com

です。メールアドレスの変更をお願いします。

《会員の皆様へ》

メールアドレス並びに住所、電話番号等が変わりましたら事務局まで、ご一報くださいますようお願い申し上げます。 〈事務局〉

【今後の行事予定】

☆8月3日(土)17時よりビールパーティー

会場：ホテルメトロポリタン仙台イースト

「フォレスト・キッチン仙台」会費 6000 円

☆9月7日(土) 第13回登山教室

☆9月15日(日)～16日(月・祝日)

宮城・山形支部交流会(鳥海温泉)

☆9月18日(水) 9月定例役員会

仙台市生涯学習支援センター(東口)

☆10月5日(土)～6日(日) 秋山山行(蔵王)

日本山岳会山行委員会との共催事業「秋の東北山旅」として実施。尚、前日の10月4日(金)鎌先温泉に前泊します。

☆10月16日(水) 10月定例役員会

仙台市生涯学習支援センター(東口)

☆10月19日(土) 第14回親子登山教室

深山(芋煮会)

☆11月20日(水) 11月定例役員会

仙台市生涯学習支援センター(東口)

諸事情により日程、場所が変更する場合があります。各行事及び山行は、その都度メール等で連絡させていただきます。何卒ご了承ください。 〈事務局〉

トピックス

宮城支部の会員数は？

東北6県の支部に入会している会員数は、下記の表の通りで、今年の日本山岳会通常総会資料に掲載された令和6年3月31日現在の会員数です。

支部名	会員数	準会員数	合計
岩手	59名	2名	61名
福島	51名	0	51名
秋田	44名	0	44名
山形	43名	1名	44名
青森	37名	3名	40名
宮城	34名	6名	40名

残念ながら宮城支部の会員数は、東北で最下位となっております。千石支部長の巻頭言にもありましたように新規会員を増やさなければなりません。会員皆様のネットワークを活かし、宮城支部会員数の底上げを図っていきましょう。まずは東北最下位を脱出したい。

〈事務局〉

【編集後記】

「マナー」とは、しかるべき行儀、作法、行動を指す。今年の富士山で、マナーにまつわる話題があった。以前からあった夜通しで登る“弾丸登山”防止と、ゴミ散乱に見られるオーバーツーリズムに対応するため、吉田ルートで5合目より1日4000人に通行を制限、尚且つ1人2000円の通行料が徴収されることになった。

もう一つは、富士河口湖町のコンビニ店舗上に見える富士山を写真撮影しようと観光客が押し寄せ、マナー違反对策で大きな黒い幕が設置された。山の中はもちろんのこと、麓でもマナーを守り自然と接したいものです。

会報・編集出版委員長 鳥山文蔵

宮城山岳通信 第 33 号

発 行 公益社団法人 日本山岳会宮城支部

発行日 2024 年 7 月 23 日

発行人 千石信夫

会報・編集出版委員 鳥山文蔵、千石信夫、富塚和衛、三宅 泰

事務局 〒983-0821 仙台市宮城野区岩切字畑中 9-12 (富塚宅)

連絡先 TEL 090-2790-3771